

講演会の感想

昨日は、同窓会初のオンライン総会企画を推進して下さいました役員の皆様のご尽力に感謝、感謝でございます。ステイホームが長く続きお会いする機会もなくなった皆様に画面を通してお会いすることが出来ました。ご準備などもさぞや大変だったことでしょう。総会も滞りなく無事終了、役員の皆様方には引き続き大役ご苦労様ですが、どうぞ、宜しく願いいたします。

さて、続く講演会！ 講師の安海将広氏は画面を通して「NEW NORMAL であらためてわかったコミュニケーションの大切さ」と題してお話し下さいました。いえいえ、これは、一方通行ではなく双方向によるワークショップでした！ グループに分かれての話し合い、2人、4人、そして全員で、いつの間にか話の内容も深められていきました。

同窓会は世代が違う会員の集まりです。2人グループでは、初めてお会いした藤本義彦さん、岡田さんと同期とか、何故かお話が弾みました！ 校長職のご苦労もありませんが、原石を育てていく楽しみも大きいでしょう！ エールをお送りします。貴重な一期一会でした！ その後、4人グループに、顔見知りの4人でした。こうしてあっという間の時間が過ぎて予定の時間をオーバー？

この貴重な体験をさせて頂いたワークショップのリーダー安海先生は国際コーチング連盟マスター認定コーチでいらっしゃいました！ パソコンの向こう側で縦横無尽行動されて、時折思いがけなく画面にパッと現れる安海先生のお姿にはっとさせられながら楽しく勉強させて頂きました。どのようにご苦心されたのか、スクリプトが頭の中に描かれていたのに違いありません。ありがとうございました。

まだ暫く続きそうなコロナとの闘いです。オリンピックは心配ですね。専門家のご意見ではオリンピックは中止が結論のようですが…。感染者を増やさずに最善の状況で実施するにはどうしたらよいか？ 悩ましい問題を抱えておりますが、一市民として最悪の事態を招かないように自粛生活を続けるしかないかな？ 皆様くれぐれもご自愛専一にお過ごし下さい。感謝！

(伊藤 恭子 60年)



校内のようす
(左：2022.1
右：2021.11)



専門委員会の活動報告

教育学科同窓会はコロナ禍に伴い、相次ぐ行事の延期や中止に追い込まれ、思うように同窓会活動が進展しない中、オンラインでの活動がメインとなり、これを軸に活動の展開を模索するも、まだ順調とはいえない状態が続いています。

2020年度においては、会報発行のため、編集委員会をオンラインで開催しましたが、2021年度はこれに加え、懸案となっている①周年記念事業に関する専門委員会、および②オンライン活動の今後の展開を模索する専門委員会を発足させ、同窓会活動の停滞を回避しつつ、意義のある取組が実施できるようめざしてまいりました。ここでは、上記3委員会の2021年度における活動について紹介します。

会報編集委員会

3つの委員会一の老舗「会報委員会」です。同窓会発足の翌年2001年に第1号「同窓会だより」が創刊し、22年の歴史がある委員会です。現在の編集長岡田純一さんは3代目で、初代編集長が浦上義夫さん、2代が奥居洋子さんと、編集長を中心とした編集委員が教育学科同窓会の皆様へ毎年途切れることなく脈々と情報をお届けしております。

コロナ禍で前号と今号はオンラインで作りました。原稿のやり取りはメールで、打ち合わせや推敲はすべて画面を通してです。今号は10月9日にスタートし、ほぼ毎月1回、時には月2回の編集会議を開催しました。「スケジュールはどうするか?」、「記事は皆さんが興味のある内容か?」、「どなたに原稿を依頼するか?」、「ページ構成は見やすいか?」、「誤字脱字はないか?」などなどすべてオンラインで相談して出来上がりました。

今号は楽しんでいただけただけでしょうか?こんなことが知りたい、あんなことを取り上げてほしいなどのご要望がありましたらご連絡ください。皆様にご満足いただけることが私たちの喜びです。(澁谷智香子 83年)

周年記念事業計画委員会

周年行事の計画・実施、同窓祭への参加等を司るのが、行事委員会です。企画当日、参加いただく皆様のご協力が、ささやかな充実感と幸せを感じる「思い出」となるよう、実施までの段取り、当日のオペレーション、事後処理・反省等を行っていきます。

これまで、同窓祭へは、「教育学科のお店」として、教育学科同窓会設立以来、出店を続けてきました(昨年のみ、コロナ禍のため、オンライン意見交換会を開催)。また、諸先輩方に多大なご協力をいただきながら、創立10周年記念行事(教育シンポジウム)、15周年記念行事(座談会)を実施してまいりました。

さて、本年は同窓会創立22周年を迎え、本来であれば、創立20周年記念行事が何らかの形で実施されている時期ではありますが、新型コロナの影響もあり、動きが取れなかったのが、実情です。

そこで、同委員会としては、周年行事を、これまでとは別な形で実施できないかと考えるに至りました。具体的には、第1弾として、ささやかな記念品の作成配布(会費納入者に限ります)、第2弾として、対面での開催が可能になるタイミングで、キャンパス内に記念植樹を実施できないかと、知恵を絞っているところです。

どんな形を取るにせよ、会員の皆様との共同作業が基本になります。今後とも、皆様からのご意見・ご要望を積極的に活かしながら、楽しく汗をかければと思っております。(樋口 晃 82年)

オンライン検討委員会

教育学科同窓会では、2020年度から役員会および会報編集委員会をオンラインで開催し、これに加え2021年度は5月から6月にかけてオンライン総会の参加増強を目的としたオンライン練習会を4回実施し、6月にオンライン総会・講演会の実施、加えて9月に同窓祭の一端としてオンライン茶話会を実施しました。

しかしながら、いずれも少人数の参加者にとどまっている点に対する配慮や、さらにオンラインの特性を考慮した取組への模索等、検討すべき点が多々存在することは否めず、加えて、対面活動の再開が不透明な状態が長期化する中、オンライン活用は今後も回避することは困難であるため、2021年度に専門委員会として本委員会を発足させました。

本委員会は2021年11月11日に初会合を持ち、今年度は概ね月1回のペースで活動してまいりました。

これまでの進捗状況としましては、すでに本年3月より毎週木曜日午前10時よりスタートしているオンライン交流会「もくじゅうの会」の発足を挙げるができると思います。今後も皆様からのお声を頂戴しつつ、多くの期待に応えられる活動となるよう努めてまいります。(岡田 純一 89年)

第28回大学同窓祭（2021年9月23日）にオンラインで参加 ～茶話会“オンラインでつながりましょう”～



大学同窓祭と言えば、教育学科同窓会のブースは毎回大人気で、鉢植え・花・バナナ・雑貨等、大学キャンパスでの出店参加を続けてきました。ところが、同窓祭は新型コロナウイルス感染症により様変わり、対面での開催が中止を余儀なくされ、それは叶いませんでした。そこで、少しでも同窓祭、そして大学キャンパス内の雰囲気をお届けしようと、皆さんにご協力をお願いしオンラインで参加することとしました。茶話会“オンラインでつながりましょう”がテーマです。

当日は、不慣れなこともあり緊張感が走りましたが、開催時間が近づくと意を決したように出席者の皆さんは落ち着かれ、茶話会がスタートしました。司会は樋口晃さん（副会長）、プロデュースは岡田純一さん（常任幹事）、参加者は16名です。

参加者全員でお話をした後、少人数に分かれて近況・話題等、最初は10分、2回目は12分の時間で語り合い、あっという間に予定時間（1時間30分）が経過しました。皆さんからいただいた感想を一部紹介します。同窓祭、そして大学キャンパスをご想像ください。

茶話会への参加は、会員や卒業生に限定せず募りました。はじめに司会者が、茶話会の趣旨や目的を説明、その後グループに分かれて、それぞれの自己紹介や近況を語り合いました。画面をとおしての語り合いではありましたが、お互いが身近な存在になったことを感じました。

大切なことは、何事でもその時の状況に合わせてできることをすること、コロナ禍で教育学科同窓会としてできることを精一杯やったこと、そのことが大切だったと思います。時期が来ればコロナも終息しました対面でのいろいろなことができる日が来ます。その過程での今回のオンライン茶話会、やったことに価値があったと思います。何事も長く続けていくことが一番大切だと思うのです。

参加できなかった方は残念だったと思います。これからもこのような機会がありますので、是非ぜひ参加していただきたい、そんな温かな茶話会でした。

企画ありがとうございました。ハードルが高いとお思いの皆様、66歳のわたしにもできます。ズームでの参加は、楽しいことがわかります。お正月の駅伝情報もいただけますよ。

次回はぜひあなたもご参加ください。

開催関係者の皆さんには、諸準備お疲れ様でした。そして有難うございました。お蔭様で楽しいひと時を過ごさせて頂きました。

青山キャンパスの銀杏並木の下での出店は叶いませんでしたが、画面を通じて皆さんとお会いできたあの時間は和やかで心温まるものでした。小グループに分かれての話し合いも楽しく時間が足りないくらいでした。

私は役員として微力ながら企画の段階から参加させて頂きましたが、話し合いの中でコロナ禍の中直接会うことが困難でも方法を講じて何とか同窓会皆さんとの絆を絶やさないようにとの熱意や会員一人一人を大切にとの教育学科同窓会魂のようなものを強く感じました。

こんな素敵な教育学科同窓会を更に盛り立てていけるよう、役員の方々や会員の皆様と力を合わせこの困難を乗り越えて頑張っていきたいと心新たにしました次第です。＜会員の皆様！思いきってオンラインに挑戦しましょう！きっと新たな世界が開けます！！＞

私たちはこれからもできることを続けていくつもりです。今後とも、会員の皆様のご協力をお願いします。9月23日の大学同窓祭で、お会いしましょう！

2022年の箱根駅伝、今回の作戦名パワフル大作戦の通り、往路・復路とも完全優勝という青学の強さを見せつけてくれた大会でした。3大駅伝では出雲駅伝、全日本大学駅伝ともに2位という悔しい結果になり、選手たちは「箱根は必ず優勝する」という強い気持ちで懸命に取り組んできました。青学の真価が問われる今回の箱根駅伝、しかし青学は他校を寄せ付けぬ圧倒的な強さで、それも10時間43分42秒という2位の順天堂に10分51秒の大差をつけて6回目の大会新記録での優勝を遂げました。

この中で特筆すべきことは、今回1年生2名（太田選手、若林選手）が出走したことです。3区の太田選手は区間2位の記録で先頭に浮上し、5区の若林選手は区間3位で往路優勝のテープをきりました。

監督車の中から選手たちに掛けた原晋監督の言葉をいくつか紹介します。高橋選手には「現役最後、得意の3キロ、出し切れ！スマイルスマイル、お前の就職先もスマイルだろ！後輩にいいところを見せて！」、佐藤選手には「いい顔してな、いい顔して襷を渡すよ！」、中村選手には「区間新ペースだから記録抜いていくよ。大記録出るぞ！」、中倉選手には「すごいよ。前人未到大記録が生まれるぞ！」。走る状況にあわせその気にさせる監督の巧みな言葉に、選手たちは頑張りが続けたことが出来ました。

今回の優勝は青学陸上競技部の総合力で勝ちとったもの、王座奪還の立役者は出走した選手はもちろんですが、的確な選手起用と指導を行った原監督・コーチ・マネージャー、そしてそれに応えたのは部員43名です。このことで私たち校友、青山学院関係者全員が選手たちから元気と希望をもらい、また私たちの応援は選手たちに力を与えたと思います。その中で何よりも忘れてならないこと、それは陸上部の教育理念だと思っています。原監督はこう言います。「学生はスイッチが入った瞬間に大きく変わります。選手たちは陸上競技部の選手ですが、その前に青山学院大学の学生です。勉強し授業を受け試験を受けて単位を取る学生。その学生達を支えているのが各学部の先生方や教職員です。悪い時は悪い、いい時はいいと普通に接してくれること、そのことに感謝しています…」と。

学生たちは4年間、陸上競技部の寮で生活しながら、大学生として学業に取り組み、陸上の練習に取り組んでいること、彼らは卒業後も各分野で活躍していること。私達は今回の箱根駅伝を通じ、喜びと元気そして誇りを再確認し、新しい年をスタートすることができました。青山学院全体が箱根駅伝という大会で一体になれた2日間でした。

ちなみに、1区で快走した志貴勇斗選手（区間5位：記録1時間1分25秒）は教育人間科学部の学生です。彼が優勝したあとのコメントはつぎの通りです。「初舞台で緊張しましたが楽しくレースができました。去年の負けからこの1年間練習を積んで絶対勝つんだ、という気持ちでやってきました」。

最後に紹介したいことが3点あります。①マネージャーのAさん（4年）は一般受験で陸上部に入部しました。しかし昨年夏、右アキレス腱の痛みが悪化しマネージャーに転向しました。マネージャーの任務を行いながら必死の勉強、そして岡山大学（国立）の歯学部合格しました。4月からは父と同じ歯科医を目指します。その一方で現役続行する学生もいます。飯田貴之主将は富士通に入社します。②卒業生の神野大地選手（セルソース）は防府マラソンで2時間9分34秒の記録により2位（日本人1位）、MGCを獲得しました。③元日の実業団ニューイヤー駅伝では卒業生が多く出走しました。3区では小椋祐介（ヤクルト）・下田裕太（GMO）・鈴木壘人（SGホールディングス）・吉田圭太（住友電工）・藤川拓也（中国電力）・梶谷瑠哉（SUBARU）、4区では吉田祐也（GMO）、5区では一色恭志（GMO）・岩見秀哉（住友電工）・山田滉介（トヨタ紡織）、6区では林奎介（GMO）などが出走しました。今後の卒業生の活躍についても目が離せません。



17号館の風景（2022.1）

（斉藤満智子 93年）

支部報告① 愛知・三重～新潟

○愛知・三重支部

この2年、毎日すごい数の新型コロナウイルス感染者が報告され、世界中の人々の日常が全く変わってしまいました。そんな中、7月に99歳で亡くなった母の荷物を整理していると、童話作家新美南吉に教えていただいた同窓生達との手紙が出てきました。私もと、青山で過ごした仲間の年賀状や今までの同窓会だよりを引っ張り出し、いろいろなことを思い出しました。

65歳で学校関係の仕事に区切りがつき、森づくりの環境学習と技能を身につけようと動き出しました。子供達と運動場を走り回った現役の頃とは違い、自分の気持ちと体の動きが一つにならないこともままありますが、週末になるとチェーンソーを持って、いそいそと森へ出掛けます。森の散策とはちょっと違います。

最近COP26で温暖化防止・石炭火力停止などの地球規模の環境問題が論議されました。私たちが間伐している森の木々はCO2をしっかりと吸って大きくなっています。その木を適切に伐り、木質バイオマスとして火力燃料にすることで、カーボンニュートラルが可能になります。間伐した木を使ってベンチや椅子などの木工品も作ります。何よりも管理された森は、生物の多様性を育み、土砂の流出を防ぎ、災害から人々の命を守ります。今行っている間伐ボランティアは、環境問題解決につながり、地球への小さなプレゼントとなると思っています。一緒にチェーンソーを持って森へなんて誘いませんが、同窓生の皆さん、それぞれの生活から、ぜひ「SDGs」に取り組んでみませんか。

こんな私は、教育学科で学んだことはどこにも出てこないただの森へ出掛けるおじさんに見えますが、私のベースには、笹森健先生（初代同窓会長）や東京だけでなく地方で暮らしている先輩後輩の同窓生との出会いから、「常に学びへの問題意識」を持ち「教えることで育てられる」という人と人とのつながりを大切にすることがあります。

オミクロン株の感染拡大など、新型コロナウイルスがどうなるのかまったく予想もつきません。気持ちが落ちこむことも多いと思いますが、ちょっと同窓会だよりに目を通し、全国の市や町や村で、私たち一人一人が「我らは青山の教育学科の同窓生」と前を向いていきましょう。

今年こそ、同窓生の皆さんが直接対面出来る総会や同窓祭が出来ますように。

*

ピーツと笛が鳴る。「ヒデさん、追い口入れていいですよ」「了解」と声を掛け、チェーンソーの刃をゆっくり入れる。檜の人工林に緊張の空気が流れる。

私たちは、第1・第3日曜に、とよた森林学校で「間伐ボランティア初級講座」を受けた者（大学出たての20代の女性、ばりばりのエンジニアのお兄さん、小さな子供のお母さんから60代の年金者まで）、年齢も仕事も経験も様々だが、東海豪雨の教訓から、矢作川水系の森を守ろうと、私たちもチームを作り、地域と一体となって間伐ボランティアを始めた。



チェーンソーなんていうと、ちょっと大変そうと思われがちだが、切り株を囲み、おにぎりを食べながら森のことを話していると、笑顔が溢れてくる。また、立ち上げ当初から先輩チームの方々がいろんな場面で丁寧に優しく、安全面には厳しく教えてくれる絆もある。

みんなの「森が元気に人が元気に」だ。

※BS朝日の『日本のチカラ』というシリーズ番組で、地域に根ざした森づくり活動が『週末チェーンソー』というタイトルで放映されました。(2019年5月)

(柴田秀夫 75年)